

安全データシート

作成日 1994年10月20日

改訂日 2021年11月24日 1/8頁

SDS No.1021-21140

1 化学品及び会社情報

化学品の名称 : 1,1-ジクロロエチレン
供給者名 : ジーエルサイエンス株式会社
住所 : 東京都新宿区西新宿6-22-1 新宿スクエアタワー30F
電話番号 : 03-5323-6611
FAX番号 : 03-5323-6622
緊急連絡先 : ジーエルサイエンス(株)福島工場 品質保証課 電話 024-533-2244(代表)
製品コード : 1021-21140、1021-
整理番号(SDS No.) : 1021-21140
推奨用途 : 標準物質(日本産業規格(JIS)Q0030に定めるもの)
使用上の制限 : 試験・研究用

2 危険有害性の要約

GHS分類 : 引火性液体 : 区分1
自己反応性化学品 : タイプG
急性毒性(経口) : 区分4
急性毒性(吸入:蒸気) : 区分4
眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性 : 区分2
発がん性 : 区分2
生殖毒性 : 区分2
特定標的臓器毒性(単回ばく露) : 区分1(呼吸器、肝臓、腎臓)
区分3(麻酔作用)
特定標的臓器毒性(反復ばく露) : 区分1(血液、呼吸器、肝臓、腎臓、
生殖器(男性))
水生環境有害性 短期(急性) : 区分2
水生環境有害性 長期(慢性) : 区分3

GHSラベル要素

絵表示又はシンボル :



注意喚起語 : 危険

危険有害性情報 :

H224 極めて引火性の高い液体および蒸気
H302 飲み込むと有害
H332 吸入すると有害
H336 眠気やめまいのおそれ(麻酔作用)
H351 発がんのおそれの疑い
H361 生殖能または胎児への悪影響のおそれの疑い
H370 臓器の障害(呼吸器、肝臓、腎臓)
H372 長期にわたる、または反復ばく露により臓器の障害(血液、呼吸器、肝臓、
腎臓、生殖器(男性))
H401 水生生物に毒性
H412 長期継続的影響によって水生生物に有害

注意書き

[安全対策]

P202 全ての安全注意を読み、理解するまで取り扱わないこと。
P210 熱、高温のもの、火花、裸火、及び着火源から遠ざけること。禁煙。
P233 容器を密閉しておくこと。
P240 容器を接地しアースをとること。

P241	防爆型の電気機器/換気装置/照明機器等を使用すること。
P242	火花を発生させない工具を使用すること。
P243	静電気放電に対する措置を講ずること。
P260	粉じん/煙/ガス/ミスト/蒸気/スプレーを吸入しないこと。
P264	取り扱い後は手をよく洗うこと。
P270	この製品を使用するときに、飲食または喫煙をしないこと。
P271	屋外または換気の良い場所でだけ使用すること。
P273	環境への放出を避けること。
P280	保護手袋/保護衣/保護めがね/保護面を着用すること。
[応急措置]	:
P301+P312	飲み込んだ場合：気分が悪いときは医師に連絡すること。
P303+P361+P353	皮膚または髪に付着した場合：直ちに汚染された衣類を全て脱ぐこと。皮膚を水/シャワーで洗うこと。
P304+P340	吸入した場合：空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。
P305+P351+P338	眼に入った場合、水で数分間注意深く洗うこと。次にコンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。
P308+P313	ばく露またはばく露の懸念がある場合：医師の診察/手当てを受けること。
P314	気分が悪いときは医師の診察/手当てを受けること。
P337+P313	眼の刺激が続く場合、医師の手当てを受けること。
P370+378	火災の場合：消火するために適した消火剤を使用すること。
P330	口をすすぐこと。
[保管]	:
P403+P233+P235	換気の良い場所で保管すること。涼しいところに、容器を密閉しておくこと。
P405	施錠して保管すること。
[廃棄]	:
P501	内容物や容器を廃棄する場合は、都道府県知事の許可を得た専門の廃棄物処理業者に委託すること。

上記で記載がない危険有害性は分類できない、分類対象外または区分に該当しない。

3 組成及び成分情報

化学物質・混合物の区分	: 化学物質
化学名または一般名	: 1,1,-ジクロロエチレン
慣用名または別名	: 塩化ビニリデン、二塩化ビニリデン
濃度	: --
化学式	: $\text{CCl}_2=\text{CH}_2$
官報公示整理番号	: 化審法：2-103 安衛法：設定されていない
CAS RN	: 75-35-4

4 応急措置

吸入した場合	: 空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。ばく露又はばく露の懸念がある場合、医師に連絡すること。気分が悪い場合は医師の手当てを受けること。
皮膚に付着した場合	: 石鹼と大量の水で洗い流す。刺激が直らない場合、炎症を生じた場合には医師の手当てを受けること。
眼に入った場合	: 水で数分間注意深く洗うこと。コンタクトレンズを外し、少なくとも15分以上大量の水で眼を洗う。直ちに医師の手当てを受ける。眼の刺激が続く場合、医師の診断、手当てを受けること。
飲み込んだ場合	: 口をすすぎ、直ちに医師の手当てを受けること。無理に吐かせないこと。
暴露した場合	: 医師に連絡すること。汚染された衣類は再使用する場合には洗濯すること。
急性症状および遅発性症状の最も重要な徴候症状	: 蒸気吸入により、一時的な呼吸器刺激性、めまい、衰弱、疲労、悪寒や頭痛などの症状を生じる。接触により眼や皮膚の発赤、痛み、皮膚の乾燥などが生じる。誤飲により腹痛やめまいが生じる。

応急措置をする者の保護 : 救助者は適切な保護具を着用すること。

5 火災時の措置

適切な消火剤 : 水噴霧、泡消火剤、粉末消火剤、二酸化炭素
 使ってはならない消火剤 : 棒状水
 火災時の特有危険有害性 : 火災時に刺激性もしくは有毒なヒューム(またはガス)が発生するため、消火の際には煙を吸い込まないように適切な保護具を着用する。
 加熱により容器が爆発するおそれがある。
 極めて燃えやすく、熱、火花、火炎で容易に発火する。
 特有の消火方法 : 火元への燃焼源を断ち、適切な消火剤を使用して消火する。
 消火のための放水等により、環境に影響を及ぼす物質が流出しないよう適切な処置をする。
 危険でなければ火災区域から容器を移動する。
 容器が熱に晒されているときは、移さない。
 安全に対処できるならば着火源を除去すること。
 消火を行う者の保護 : 消火活動は風上から行い、有害なガスの吸入を避ける。呼吸保護具を着用する。消火後再び発火するおそれがある。

6 漏出時の措置

人体に対する注意事項、
 保護具及び緊急時措置 : 屋内の場合、処理が終わるまで十分に換気を行う。漏出した場所の周辺に、ロープを張るなどして関係者以外の立ち入りを禁止する。作業の際には適切な保護具を着用し、飛沫等が皮膚に付着したり、蒸気/ミスト/粉じん/ガスを吸入しないようにする。風上から作業して、風下の人を退避させる。
 環境に対する注意事項 : 漏出した製品が河川等に排出され、環境への影響を起こさないように注意する。汚染された排水が適切に処理されずに環境へ排出しないように注意する。
 封じ込めおよび浄化の方法および機材 : 適切な保護具をつけて処理すること。土砂・吸着剤などに吸着させて取り除く。密閉できる空容器に集めて適切に処分する。

7 取扱い及び保管上の注意

取扱い

技術的対策 : 火気厳禁。高温物、スパークを避け、強酸化剤との接触を避ける。
 屋内作業場における取扱い場所では、局所排気装置を使用する。
 機器類は防爆構造とし、設備は静電気対策を実施する。
 作業衣、作業靴は導電性のものを用いる。
 安全取扱注意事項 : 容器を転倒させ落下させ衝撃を与え又は引きずる等の粗暴な扱いをしない。
 漏れ、溢れ、飛散などしないようにし、みだりに蒸気/ミスト/粉じん/ガスを発生させない。
 吸い込んだり、眼、皮膚及び衣類に触れないように、適切な保護具を着用する。
 取扱場所には関係者以外の立ち入りを禁止する。
 衛生対策 : 取扱い後は手、顔等をよく洗い、うがいをする。
 指定された場所以外では飲食、喫煙をしてはならない。
 休憩場所では手袋その他汚染した保護具を持ち込んではいない。

保管

適切な保管条件 : 保管場所で使用する電気機器は防爆構造とし、機器類はすべて接地する。
 容器は直射日光を避け、冷暗所に密閉して保管する。
 避けるべき保管条件 : 火花、高温、スパーク、混触危険物質との接触を避ける。
 技術的対策 : 換気のない場所で容器を密閉し保管する。日光から遮断すること。火気厳禁。
 混触危険物質 : 強酸化剤、強塩基、強酸、火源の近くに保管しない。
 安全な容器包装材料 : ガラス等

8 ばく露防止及び保護措置

設備対策 : 屋内作業場での使用の場合は発生源の密閉化、局所排気装置を設置する。
取り扱い場所の近くに安全シャワー、手洗い・洗眼設備を設け、その位置を明瞭に表示する。

管理濃度 作業環境評価基準 : 設定されていない

許容濃度

日本産業衛生学会 : 設定されていない

ACGIH TLV-TWA : 5 ppm

保護具

呼吸器の保護具 : 保護マスク

手の保護具 : 不浸透性保護手袋

眼の保護具 : 保護眼鏡

皮膚及び身体の保護具 : 保護衣・保護長靴

適切な衛生対策 : マスク等の吸着剤の交換は定期又は使用の都度行う。

9 物理的及び化学的性質

物理状態 : 液体

色 : 無色

臭い : 特異臭

融点/凝固点 : -122℃

沸点または初留点 : 32℃

可燃性 : データなし

爆発下限界及び爆発上限界 : 5.6%(下限)~16%(上限)

引火点 : -25℃ (密閉式)

自然発火点 : 570℃

分解温度 : データなし

pH : データなし

動粘性率 : データなし

溶解度 : 0.25 g/100mL (水)(25℃)

溶媒に対する溶解性 : 多くの有機溶剤に可溶

n-オクタノール/水分配係数

log Po/w : 1.32

蒸気圧 : 66.5 kPa (20℃)

密度及び/または相対密度 : 1.2

相対ガス密度(空気=1) : 3.3

粒子特性 : 該当しない

10 安定性及び反応性

反応性 : 熱に不安定。移送時の流動、噴霧、漏れ等の際に静電気を発生しやすく、僅かな放電で引火する危険がある。

化学的安定性 : 熱に不安定。移送時の流動、噴霧、漏れ等の際に静電気を発生しやすく、僅かな放電で引火する危険がある。

危険有害反応可能性 : 酸化剤や過氧化物との接触で火災や爆発を起こすことがある。日光、銅、アルミニウムの影響により容易に重合し、火災や爆発の危険を伴う。

避けるべき条件 : 日光、熱、裸火、高温、スパーク、静電気、その他発火源、混触危険物質との接触

混触危険物質 : 強酸化剤、過氧化物、クロルスルホン酸、強酸、金属類（鉄、銅、銅合金、アルミニウム、アルミニウム合金など）

危険有害な分解生成物 : 一酸化炭素、二酸化炭素、塩化水素、ホスゲンなど

1 1 有害性情報

- 急性毒性(経口) : ラットのLD50値として、約1,500 mg/kg (ATSDR (1994))、1,500 mg/kg (EHC 100 (1990)、PATTY (6th, 2012)、CICAD 51 (2003)、IRIS Tox. Review (2002))、1,510 mg/kg (EHC 100 (1990)、ATSDR (1994)、DFGOT vol.8 (1997))、1,510~1,550 mg/kg (NITE初期リスク評価書 (2007))、1,550 mg/kg (CICAD 51 (2003)、IRIS Tox. Review (2002)、DFGOT vol.8 (1997)、ATSDR (1994))、1,800 mg/kg (CICAD 51 (2003)、IRIS Tox. Review (2002))、2,500 mg/kg (ACGIH (7th, 2001)) との7件の報告がある。
- 急性毒性(経皮) : データ不足
- 急性毒性(吸入：蒸気) : ラットのLC50値 (4時間) として、415~32,000 ppm の範囲内で21件の報告がある。2件が区分2に (NITE初期リスク評価書 (2007)、ATSDR (1994)、EHC 100 (1990))、4件が区分3に (ATSDR (1994)、EHC 100 (1990))、14件が区分4に (NTP TR582 (2015)、NITE初期リスク評価書 (2007)、CICAD 51 (2003)、IRIS Tox. Review (2002)、DFGOT vol.8 (1997)、ATSDR (1994)、EHC 100 (1990))、1件が区分外に該当する (EHC 100 (1990))。
- 急性毒性(吸入：粉じん、ミスト) : データ不足
- 皮膚腐食性/皮膚刺激性 : ウサギの皮膚刺激性試験において皮膚刺激性が認められたが、本物質に添加された重合禁止剤 4-メトキシフェノールが刺激性に関与した可能性がある(NITE初期リスク評価書 (2007)、DFGOT vol.8 (1997)、EHC 100 (1990)、PATTY (6th, 2012))。
- 眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性 : 本物質は眼、皮膚、気道を刺激する (MOE初期評価第14巻 (2016)、CICAD 51 (2003)、GESTIS (Access on May 2020))。
(2) 本物質は眼及び皮膚に対して中等度の刺激性を有する (MAK (DFG) vol.8 (1997))。
(3) OECD TG 437に準拠し、ウシ角膜を用いたin vitro眼損傷性試験 (BCOP) において、平均刺激性スコア (IVIS) は43.9であり、中等度の眼刺激性物質と判定された (AICIS IMAP (2016)、REACH登録情報 (Access on June 2020))。
(4) 本物質はヒト及び動物に適用すると眼刺激性を生じるが、その刺激はすぐに消失する。この刺激性は製品に含まれるp-ヒドロキシアニソールの影響の可能性がある (ATSDR (2019)、NITE初期リスク評価書 (2007)、NTP TR582 (2015)、ACGIH (7th, 2001)、EHC 100 (1990)、GESTIS (Access on May 2020)、HSDB (Access on May 2020))。
- 呼吸器感作性 : データ不足
- 皮膚感作性 : マウスを用いた皮膚感作性試験 (LLNA法) で陰性との記述 (CICAD 51 (2003)) があるが、他にデータがない。
- 生殖細胞変異原性 : in vivoでは、ラット、マウスの優性致死試験で陰性、マウス骨髄細胞及び末梢血、ラット骨髄細胞の染色体異常試験で陰性、チャイニーズハムスター骨髄細胞の染色体異常試験で陽性である (NITE初期リスク評価書 (2007)、ACGIH (7th, 2001)、ATSDR (1994)、CICAD 51 (2003)、DFGOT vol.8 (1997)、EHC 100 (2007)、EPA IRIS Tox Review (2002)、IARC 71 (1999)、NTP TR582 (2015))。In vitroでは、細菌の復帰突然変異試験で陽性、哺乳類培養細胞のマウスリンフォーマ試験で陽性、遺伝子突然変異試験で陰性、染色体異常試験で陽性、陰性の結果、姉妹染色分体交換試験で陽性である (NITE初期リスク評価書 (2007)、ATSDR (1994)、CICAD 51 (2003)、DFGOT vol.8 (1997)、EHC 100 (2007)、EPA IRIS Tox Review (2002)、IARC 71 (1999)、NTP TR582 (2015))。
- 発がん性 : ラット及びマウスの経口経路での試験では発がん性の証拠はなかった。吸入経路での試験ではハムスターには投与に関連した腫瘍性変化はなかったが、マウスでは肺腺腫の増加が雌雄に、腎臓腫瘍及び乳腺腫瘍の増加が各々雄及び雌にみられた (IARC 71 (1999))。これらの結果等から、IARCがグループ3に (IARC 71 (1999))、ACGIHがA4に (ACGIH (7th, 2001)) 分類したのに対し、EPAはグループC (possible human carcinogen: 区分2相当) に分類した (IRIS Summary (2002))。ラット、又はマウスに2年間吸入ばく露した結果、ラットで悪性中皮腫、鼻腔及び腎臓腫瘍が雄に、甲状腺腫瘍、単核球性白血病が雌に、マウスでは肝臓腫瘍が雌雄に、腎臓腫瘍が雄に、多臓器の血管腫、血管肉腫が雌にそれぞれ認められ、雄ラット及び雌雄マウスで明らかな発がん性の証拠があり、雌ラットではある程度の証拠があると結論された (NTP TR582 (2015))。

生殖毒性 : ラットを用いた経口経路（飲水投与）による3世代生殖毒性試験において、F0、F1、F2各世代とも2腹を妊娠・出産させたが、F1、F2世代に肝臓影響（脂肪肝）がみられる用量（100, 200 ppm）においても受胎率、次世代の発生・発育に有害影響は示されず、生殖毒性はないと結論されている（EHC 100 (1990)、ACGIH (7th, 2001)、PATTY (6th, 2012)）。一方、妊娠ラット、又は妊娠ウサギの器官形成期に吸入ばく露した発生毒性試験では母動物毒性がみられる用量でラット胎児に骨化遅延と波状肋骨が、ウサギ胎児に胚/胎児吸収の増加と骨格変異がみられている（EHC 100 (1990)、ACGIH (7th, 2001)、PATTY (6th, 2012)）。この他、妊娠動物（ラット、マウス）の器官形成期に吸入ばく露した試験で母動物に一部死亡例（死亡率不明）が発現する用量で胎児に奇形（水頭症）、早期吸収胚の増加、全胚吸収がみられたとの報告もある（EHC 100 (1990)）。

特定標的臓器毒性

(単回ばく露)

: ヒトでは本物質の急性吸入ばく露により、中枢神経系の抑制ないし興奮症状を示し、重篤な場合は意識不明になることが報告されている（NITE初期リスク評価書 (2007)）。更に本物質を含むタンクの洗浄時に急性吸入ばく露されたヒトの症例で、三叉神経と舌下神経及び聴神経が持続的に傷害された例が2例報告されている（ATSDR (1994)）。実験動物では本物質の区分1に相当するガイダンス値範囲内の用量の単回経口又は単回吸入ばく露により、毛細胆管の傷害、肝細胞の小葉中心性壊死、近位尿管の傷害、肺の水腫と出血が起こることが報告されている（NITE初期リスク評価書 (2007)、CICAD 51 (2003)）。さらに実験動物における本物質の単回吸入ばく露による死亡例ではうずくまり、呼吸困難、昏睡、麻酔状態を呈して死に至ることが報告されている（NITE初期リスク評価書 (2007)、ATSDR (1994)）。

特定標的臓器毒性

(反復ばく露)

: ヒトについては、6年以下のばく露期間で作業していた重合工場作業員27/46人（59%）に肝機能障害が認められたとの報告がある（NITE初期リスク評価書 (2007)、ATSDR (1994)）。実験動物では、ラットを用いた飲水投与による2年間反復投与毒性試験において、区分1相当の50 ppm (9 mg/kg/day) で軽度の小葉中間性の脂肪変性を伴う肝細胞腫脹の報告がある（NITE初期リスク評価書 (2007)、ATSDR (1994)）。ラットを用いた14週間吸入毒性試験において区分1の範囲である6.25~50 ppm (ガイダンス値換算：0.017~0.132 mg/L) で呼吸器への影響（嗅上皮の萎縮・鉍質化・壊死、鼻甲介の萎縮等）、肝臓への影響（小葉中心性細胞質変性、細胞質空胞化等）、区分2相当の100 ppm (ガイダンス値換算：0.26 mg/L) で上記に加えさらに精巣への影響（精子の運動性低下、精子数減少）の報告（NTP TR582 (2015)）、ラットを用いた105週間吸入毒性試験において、区分1の範囲である25~50 ppm (0.099~0.198 mg/L) で呼吸器への影響（鼻腔の鼻甲介萎縮・骨過形成、嗅上皮呼吸上皮化生、呼吸上皮過形成、慢性活動性炎症等）、肝臓への影響（肝臓の炎症・び慢性脂肪化等）の報告（NTP TR582 (2015)）、マウスを用いた52週間吸入毒性試験において区分1相当の10 ppm (0.026 mg/L) で腎臓退行性変性、膿瘍、腎炎の報告がある（NITE初期リスク評価書 (2007)）。マウスを用いた14週間吸入毒性試験において、区分1の範囲である6.25~50 ppm (ガイダンス値換算：0.017~0.132 mg/L) で血液への影響（赤血球数・ヘモグロビン濃度・ヘマトクリット値の減少）、呼吸器への影響（喉頭の呼吸上皮の扁平上皮化生）、精巣への影響（精巣上体尾部精子数減少）、腎臓への影響（腎症、尿管壊死・タンパク円柱）、区分2相当の100 ppm (ガイダンス値換算：0.26 mg/L) で上記に加えさらに肝臓への影響（肝臓の壊死・小葉中心性肝細胞肥大）の報告（NTP TR582 (2015)）、マウスを用いた105週間吸入毒性試験において区分1の範囲である6.25~25 ppm (0.025~0.099 mg/L) で呼吸器への影響（鼻腔の鼻甲介萎縮・骨過形成、嗅上皮呼吸上皮化生等）、腎臓への影響（腎臓の尿細上皮過形成）の報告がある（NTP TR582 (2015)）。

誤えん有害性

: HSDB (Access on June 2016) に記載されて数値データ（粘性率: 0.330 mPa・s (20℃)、密度 (比重): 1.22 (20/4℃)）より、動粘性率は0.27 mm²/sec (20/20℃) と算出される。

1 2 環境影響情報

水生環境有害性 短期(急性) : 藻類（クラミドモナス）72時間EbC50 = 9.12 mg/L (CICADs 51, 2003、ECETOC TR91, 2003) である。

水生環境有害性 長期(慢性) : 慢性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく（BODによる分解度：0%（既存点検, 1991））、藻類（セネデスムス）の96時間EC10 = 240 mg/L (CICADs 51, 2003)。

慢性毒性データが得られていない栄養段階に対して急性毒性データを用いた場合、急速分解性がなく（BODによる分解度：0%（既存点検, 1991））、甲殻類（オオミジンコ）のLC50 = 11.6 mg/L (CICADs 51, 2003) である。

生態毒性 : 藻類（クラミドモナス）72時間EbC50 = 9.12 mg/L (CICADs 51, 2003、ECETOC TR91, 2003) 。

残留性・分解性	: 急速分解性がない（BODによる分解度：0%（既存点検, 1991））。
生態蓄積性	: データなし
土壤中の移動性	: データなし
オゾン層への有害性	: 本製品はモントリオール議定書の附属書に列記されていない。

1 3 廃棄上の注意

残余廃棄物	: 廃棄においては関連法規ならびに地方自治体の条例に従うこと。 都道府県知事の許可を得た専門の廃棄物処理業者に委託処理する。
汚染容器及び包装	: 空容器を廃棄する場合、内容物を完全に除去した後に処分する。

1 4 輸送上の注意

国際規制

海上規制情報	: IMOの規定に従う。
UN No.	: 1303
Proper Shipping Name	: VINYLIDENE CHLORIDE, STABILIZED
Class	: 3
Sub Risk	: --
Packing Group	: I
Marine Pollutant	: Applicable
航空規制情報	: ICAO/IATAの規定に従う。
UN No.	: 1303
Proper Shipping Name	: Vinylidene chloride, stabilized
Class	: 3
Sub Risk	: --
Packing Group	: I

国内規制

陸上規制	: 国内法令の規定に従う。
海上規制	: 船舶安全法の規定に従う。
国連番号	: 1303
品名	: 塩化ビニリデン(安定化剤入りのもの)
クラス	: 3
副次危険	: --
容器等級	: I
海洋汚染物質	: 該当
航空規制情報	: 航空法の規定に従う。
国連番号	: 1303
品名	: 塩化ビニリデン(安定化剤入りのもの)
国連分類	: 3
副次危険	: --
容器等級	: I
緊急時応急措置指針番号	: 130P

1 5 適用法令

毒物及び劇物取締法	: 非該当
労働安全衛生法	: 名称等を表示し、又は通知すべき危険物及び有害物 別表第9 No.241(1,1,-ジクロロエチレン) 危険物・引火性液体(施行令別表第1第4号)
化管法	: 第1種指定化学物質(法第2条第2項、施行令第1条別表第1) No.158(1,1,-ジクロロエチレン)
化審法	: 既存物質
消防法	: 危険物第4類引火性液体、特殊引火物(法第2条第7項危険物別表第1・第4類)
船舶安全法(危規則)	: 引火性液体類(危機則第3条危険物告示別表第1)
航空法	: 引火性液体(施行規則第194条危険物告示別表第1)

海洋汚染防止法	: 有害液体物質 Y類物質(施行令別表第1) 危険物(施行令別表第1の4) 個品運送P(施行規則第30条の2の3、国土交通省告示)
水質汚濁防止法	: 有害物質(法第2条第2項、施行令第2条)
大気汚染防止法	: 有害大気汚染物質(中環審第9次答申) 揮発性有機化合物(法第2条第4項)(環境省から都道府県への通達)
土壌汚染対策法	: 第1種特定有害物質(施行令第1条)
廃掃法	: 特別管理産業廃棄物(法第2条第5項、施行令第2条の4)

1 6 その他の情報

引用文献等

ezCRIC 日本ケミカルデータベース株式会社
独立行政法人 製品評価技術基盤機構 化学物質総合情報提供システム(CHRIP)
化学品安全管理データブック、化学工業日報社
16918の化学商品、化学工業日報社(2018)
航空危険物規則書 第62版邦訳 等・他

記載内容の取扱い

全ての資料や文献を調査したわけではないため情報漏れがあるかもしれません。また、新しい知見の発表や従来の説の訂正により内容に変更が生じます。重要な決定等にご利用される場合は、出典等をよく検討されるか、試験によって確かめられることをお勧めします。なお、含有量、物理化学的性質等の数値は保証値ではありません。また、注意事項は、通常的な取扱いを対象としたものなので、特殊な取扱いの場合には、この点にご配慮をお願い致します。